鈴木商店調査書「紡績業」「佐賀紡績株式会社」（原書 P115～123）

紡績業

時局以来、幾多新事業の画策に懈らず、以て戦時利益の獲得を図ると共に平和克復後の業礎確立に余念無き有様なるが、就中同店は原棉の輸入及綿糸、綿製品の輸出を取扱ひ、逐年業務の進展を示し居れるにも拘はらず、未だ紡績業に対しては自家経営は勿論、密接なる関係を有せる既設会社とても是無き状態にて、事業好みの同店としては多大の遺憾を抱き居りしが、斯業の戦時利益の益々多大なると、戦後も亦頗る嘱望すべき事由あるを以て、昨年中佐賀紡績会社（資本金参百円［原文ママ。正しくは“参百萬円”か］、内払込四分の一）の創立に際し約半数の株式を引受け、全然其実権を掌握せるも、独り佐賀紡を以て満足する能わず、密々既設会社に着目しつつある折柄、偶々天満織物会社が其資本金貳百萬円を一躍五百萬円に増加すべき既定方針の下に増資六萬株中二萬株は旧株二株に付一株を割当て、残余四萬株を去る三月中、大阪信託団の手を経てプレミアム付を以て売出したるより、同店は得たり賢こしと信託団に交渉の結果、些少のプレミアム付を以て一手に引受け従来所有の旧株を合し、今や全く同社の死命を制し得べき権利個数を有するに至れり。

而して、現在佐賀、天満両社に対する投資額約壱百萬円内外に達する。

佐賀紡績株式会社（原書 P117～123）

佐賀市松原町八十三番地

設立　　大正五年十一月

資本金　参百萬円也　内払込金七拾五萬円也

目的　　一般紡績織布業

重役氏名左の如し

専務取締役	井田亦吉	取締役	橋本喜造
取締役	原　眞一	同	竹村房吉
同	土屋新兵衛	同	福田慶四郎
同	伊丹彦次郎	同	太田米三郎
同	川副綱隆	監査役	西岡貞太郎
監査役	古賀製次郎	同	松尾寛三
相談役	金子直吉	相談役	野口能毅

主なる株主（鈴木側）氏名左の如し

2,000 株	井田亦吉	2,000 株	西岡貞太郎
1,500 〃	土屋新兵衛	1,500 〃	宮本政次郎
1,500 〃	隅田伊賀彦	1,500 〃	森　衆郎

1,500 〃　竹村房吉　　1,500 〃　波多野恕吉
1,000 〃　藤田助七　　3,000 〃　山下亀三郎
3,000 〃　土屋、宮本、隅田、森、竹村、波多野六氏にて引受分配せり

同上（橋本喜造氏側）
16,500 株　橋本喜造　　2,000 株　原　眞一
500 株　　川副綱隆　　1,000 株　橋本氏に於て引受く

同上（佐賀側）
1,000 株　伊丹弥太郎　　1,000 株　古賀善兵衛
1,000 〃　古賀製次郎　　1,000 〃　福田慶四郎
1,000 〃　深川喜次郎　　500 〃　伊丹彦次郎
500 株　太田米三郎　　500 株　松尾寛三
500 〃　谷口清八　　500 〃　下村詮之助
500 〃　古賀萬次郎　　500 〃　勝田龍吉郎
500 〃　山口錬一　　500 〃　古賀春一
500 〃　田中猪作　　外に公募分の二千株 略

会社の沿革及現況
同社は佐賀市一部有志の発起に係り、市長野口能毅氏は発起人を代表して屢々阪神間を往来し、遂に半田綿行と提携し綿行自ら其株式二割以上の引受を約し、其他の株式募集に可及的尽力を惜しまざるべしとの有利なる条件を締結し、皈来数回に亘る集会を経て漸く古賀、百六、栄の三銀行に於て株式募集を引受くるに至りたるが、其後銀行団の斡旋誠意を欠き、何等具体的進行の経過を示さず、折角興起せる人気も漸く沈静に皈せんとせり。

然るに、近時九州の各種事業に着目し来れる鈴木商店は同社の前途有望なるに嘱目し、予て舩成金の称ある橋本喜造氏と共に其株式大部分の引受を申込み来りしかば、気勢俄かに揚り、同商店西部監督土屋新兵衛氏及井田亦吉氏、其他同地に出張し数回の会合をを経て、結局半田綿行との関係を絶ち、茲に鈴木系統の後援を受くることとなりしが、其の後打合せ愈進捗し、株式総数六萬株の内四萬株を鈴木、橋本他発起人十氏に依り引受け、残余の二萬株を佐賀側発起人に割当つる事とし雙方の協議成立し、大正五年拾月仮定款を作製するに至りしも、其後一般よりの株式引受申込み頻々たるものあり、会社発起の趣旨は斯業の性質を周知せしめ、汎く各階級の賛成を得るにありしを以て、特に発起人引受株数の削減を図り、内貳千株を公募することとし、同年十一月六日より八日に至る三日間募集を発表したる結果、応募者一萬株以上に達し、創立委員も其割当てに困難せりと云ふ。

斯くて、同月中旬第一回の払込を徴し創立総会を開き、役員の選定を了り、茲に同社は適法の成立を告ぐるに至れり。

而して、会社は資本金を参百萬円とし、貳萬錘の紡績機と三百台の織機を据付け、主に十六番手糸の紡出に従事する目的なるが、其後時局の進展に伴ひ各種機械類及諸材料の価格は暴騰を告げ、特に紡機は世界の市場を通じて払底せる有様にして、注文を発するも容易に入手覚束無き状態なれば、果して幾年の後二万錘全部の機械据付を了するに至るや、将亦其建設費に如何なる変動を生ずるやは不明にして、建設費の多寡は直接会社の利益率に多大の関係を有するに想到せば、同社の前途今俄かに逆賭すべからざるも、昨年同社が印度孟買に於て買収したる太糸七千錘の中古機械は紡機輸入の困難なる現下の情勢に徴し時節柄成功と称すべく、而も其の価格の如きも約拾萬円内外（一錘約拾三円内外）を支出したるに過ぎざるものの如し。

工場は佐賀駅に隣接せる地域三萬坪を有し、安藤組をして土木建築工事を請負はしめたるが、工費約三拾萬円内外にして既に基礎工事を了へ建築に着手し居れば、近く竣成を告ぐるに至るべく、一面女子の募集を開始し、既に養成女工を大阪某工場に依嘱せる由なるが、諸般の準備着々進捗し、遠からず操業の開始を見るに至るべく、兎に角紡機は前記の如く太糸七千錘を据付けたるに過ぎず、残余の壱萬三千錘は到着期未定にして、差当り同社は既設七千錘と三百台の織機を製造に従事するものと見るの外無きが如し。

尤も、七千錘の能力は織機五百台を用ゆれば全部消化すべきやにて、一時予定の織機三百台を五百台に増加し、製品全部を織布すべしとの説もありしが、結局当分現状を維持することに決定せり。

而して、製品の販売及原料の仕入等は当初鈴木商店との契約に基き、全部同店に於て之を引受くる事となり居る由にて、相当安全なる地歩を有せり。

要するに、同社は鈴木商店と佐賀実業家との共同事業たるも、或意味に於ては鈴木商店の間接事業とも見るを得べく、同社が既に七千錘の機械を有し、近く事業の開始を見んとするの運びに至れる如きは斯業者の等しく其敏捷に驚嘆せる処なり。